

[研究論文]

帝都復興祭における広告行列について

吉岡 三貴

1. はじめに

大正12年（1923年）に起きた関東大震災からの帝都復興事業を記念して昭和5年（1930年）に帝都復興祭が挙行された。以下、東京市役所（編）の『帝都復興祭志』よりその目的にあたる部分を引用する。

「仍て東京市は斯の如き曠世の大事業完成を機に陽春三月をトし、畏くも聖上課陛下の御親臨を仰き奉つて復興帝都の實状を奉告して千歳一遇の光榮に浴さんことを希ひ、一は内外の廣大なる援助に對し帝都復興を報答し、以て盛事を永く記念せんとする趣意によりて帝都復興祭の挙行を企てたのである」（東京市役所 1932：19）。

つまり、天皇に復興した帝都の実情を実際に見せ知らせること、内外の多大なる援助に対して復興を報答して盛大な事業を記念しようすること、という2つの目的があったようだ。帝都復興に関しては、都市計画、建築学的な視点からの研究は見られるものの、帝都復興祭における音・行列という視点からの研究はあまり見られない（注1）。しかし、そこでは、大きく分けて4つの性格を持つ行列が行われ（【表1】）、市民を熱狂の渦に巻き込んでいったことが残された資料から読み取る事ができる。さらにそれらは行列をする際に音及び音楽を伴うものであった。その中でも、帝都復興祭を利用し株式会社主催で行われた広告祭は、日本で最初と言われ、政府主催の行列とは一線を画す広告行列を伴うものであった。そこで本稿では広告祭・広告行列に焦点を当て、祭や行列の在り方、そこでの音の役割を考察し、都市社会における祭・行列及び音楽がどのように機能していったのかを探る手がかりにしたいと考える。

2. 広告祭について

2-1 概要

以下、但し書きの無いものは、高森有吉著の『どきゅめんと正路喜社』pp.82-85による。広告祭は昭和5年（1930年）3月25日に行う予定であったが、雨天により、翌26日に変更された。各種新聞記事及び高森有吉著の『どきゅめんと正路喜社』記載「新聞の日本」の記者によれば、12:30から広告祭が、14:00から広告行列が行われた。黒崎雅雄著の『広告祭グラフ』によれば、翌3月27日には19:30～22:00には広告祭感謝の夕が行われた。広告祭は神事と祝賀会に分かれている。

3月26日

- 1-1 広告祭 式典の神事（12:30～）
- 1-2 広告祭 祝賀会（式典終了後～）
- 2 広告行列（14:00～20:30（予定では、16:30まで））

3月27日

- 3 広告祭感謝の夕（19:00～22:00）

（広告祭のタイムスケジュールについては【表2】を参照。）

広告祭の式典は芝公園増上寺隣の広場に特設された広告祭広場にて神式で挙行された。広場中央に祭壇が設けられ、祭神として福の神、大黒天が安置される。笙、篠篥の奏楽のうち、神官、正路喜社重役、来賓一同着席。最後に一同起立し、《君が代》を二唱して式典の神事を終了する。

その後、広告祭実行責任者黒崎雅夫重役が祝賀会の開会を宣言する。正路喜社社長代理及び商工大臣等の挨拶が続き、正路喜社専属ジャズバンドの《廣告祭行進曲》合唱の後に式典と祝賀会の幕を閉じた。尚、広告祭プログラムでは、最後に万歳三唱をしたとの記述も見られる（黒崎 1930: 15）。

広告行列は、花火を合図として正路喜社のジャズバンドを先頭に《廣告祭行進曲》を歌いながら行列を開始した。東京朝日新聞によれば、「十隊に別れジャズバンドを各々先頭にして賑やかに市中をねり歩くことになつてゐる」（1930「華をきそふ御巡幸沿道 各區の催しに市から補助中に特異な廣告祭」『東京朝日新聞』3月24日）。徒步隊、仮装車、新聞社のグループに分かれて行列をし、上野公園内の解散場にて到着順に解散。参列者全員の解散が修了したのが19:30。各地方新聞支局員、正路喜社社員等が、「廣告祭万歳！正路喜社万歳」を唱えて別れたのが20:30であった。因みに当初の終了予定は16:30であった。

広告祭感謝の夕は、朝日講堂にて行われた。朝日新聞社撮影の復興祭ニュースの映画上映、広告劇、正路喜社から出演者への花輪贈呈、《廣告祭行進曲》の独唱、正路喜社写真班による正路喜社ニュースの上映。万歳連呼のうちに22:00解散となった。

尚、読売、報知、東京日日、の各新聞社は広告行列に関して、3月22日、参加団体数163団体、仮装車134台、参加人員989名、と報じている。

又、広告行列については、「参加諸君ノ誠意ニ信頼シ努めて寛大ニ處置シタリ」と警視総監丸山鶴吉が祝詞で述べていたが、警視庁取締規則も存在していた。

2-2 広告諒解運動と広告祭

広告祭は、そもそも帝都復興祭のために行われた祭ではなかった。主催者側の状況を見てみることにする。『廣告祭グラフ』によれば、大正13年震災後間もなく東京において広

告祭を新聞広告関係者で催したら如何かとの議があったという。正路喜社は、広告諒解運動の一環として「広告祭」以前の1924年10月に「第1回文化講演会」を催していた。一般大衆に広告理解の観念を与えること、つまり、広告が消費経済にとって利益をもたらすものであり読んでもらう為には、広告祭によってその共感を求めるのが一番手近だとの考え方によるものであった。又、この運動は正路喜社に限ったことでは無かった。『日本広告史』によると、広告諒解運動は「広告本来の意義を広告の受け手ばかりか出し手にも諒解してもらおう」と広告会社が考えた運動であった。正路社の他にも、萬年社の「広告論」「広告年鑑」の発行が運動として揚げられている。つまり、その運動の一環として広告祭及び行列があるというのだ。

『日本広告史』によると、「広告祭」は黒崎雅雄取締役企画部長と第3代社長布屋徹吉のアイデアと推進力によるところが大きかった。ただし、この広告祭という発想自体は、日本で生まれたものではなく、世界最初の広告祭は1900年ドイツのケルンに於いて開催されたものであるという。さらに、正路社の郡山幸男氏はニューヨークのメーシー百貨店にて広告祭が行われた活動写真を1929年に見ているうちに「廣告祭はどんなものであるか、製作物に判然りした概念を擱み得たと信じた」(黒崎 1930:73)という。

2-3 日本における広告祭の始まり

各種新聞記事では帝都復興祭における広告祭について「珍奇」「奇抜」「日本初」という表現が目立っていたが、日本において広告祭はそれ以前から行われていた様だ。愛知県商品陳列所発行の『愛知商工176号』の中で、愛知県商品陳列所主事補の安良城盛雄による「広告祭に就て」という記事が掲載されている。それによれば、商品祭としては名古屋広告協会主催の大正15年の開催が最初であったという。ただし、「その實質は日々取り扱つて居る商品を祭り感謝し會員及一部顧客の間の親睦を計つたのにとどまり、重要な要素たる街頭に進出して大衆にかける作り物がなかつたから所謂廣告祭とふことはどうかと思ふ」(愛知県商品陳列所 1931:27)。では、典型的な広告祭がいつ行われたのか。それは、静岡実業協会が主催し昭和3年8月15~17日の3日にわたって開催された広告祭が我が国に於ける最初の広告祭であるという。東京で広告祭は行われる2年前である。その広告祭では、8月15日 14:00、静岡県紺屋町小浜神社で、市長を始め朝野の名士が多数列し、広告感謝祭及び各商家の福徳員満祈願祭が行われた。神前には商家の守護神大黒様を祭り、駿河小判を形どった金色の御守り札三萬枚及び御供物として、市内各商店から数々の商品を供え小浜神社々司の祝詞と神社樂人の奏楽があり、市長、市會議町を始め多数の来賓はそれぞれ神前に礼拝して商家の繁昌家運長久を祈り、16:30に式を終えた。18:00には実業協会参加商店が思い思いに意匠をこらしてさまざまの行燈が80余個集合し、第2夜、第3夜と続けて行燈の数は毎日増したという。実業協会の幹事連は皆揃いの印袢纏で豆

絞りの手ぬぐいで向鉢巻きし手に弓提灯を持ち、魚がし連の樽神輿を先頭に美しく飾り立てた屋台がそれに次ぐ。尚、この広告祭でもオリジナルの《広告祭行進曲》が作られていた様で、行燈の間々に広告祭行進曲合唱隊が入った。その様子は「小判の御守札は神社で祈願をこめて恵比寿大黒に扮した二名の福男が沿道の見物人に振りまいたが、ひしめき合ひで怪我人迄出した程盛なものであつた」（愛知県商品陳列所 1931：30）という。ただし、帝都復興祭では、昭和5年3月27日の晩に誠文堂主催で朝日講堂において行われた「廣告祭感謝の夕」にて、マネキンガールを使用しての広告劇をおこなっていた。これは、街頭で行列をするのとは異なり、舞台上で客席に向かって商品、或は会社の宣伝をするための寸劇をするというものであったようだが、この広告劇に関しては帝都復興祭が日本で最初のものであったという。広告劇については本稿2-6において詳しく述べることとする。

さらに安良城は、広告祭には二種類あると述べている。その一つは「或る商品又は商業の繁昌を祈つて神を祭り、餘興として作りものを造つて街を巡つて大衆に觀賞せしめ併せてその商品又は商業の宣傳をなすもの」（愛知県商品陳列所 1931：21）であり、もう一つは「廣告祭の宗教的型式を全然省略して—或は潛在意識があるかも知れない—所謂お祭騒ぎたる行列をなして年中行事たらしむる一方、廣告的効果を收めんとするもの」（愛知県商品陳列所 1931：21）である。前者の場合にも福の神を祭るものと商品そのものを偶像化したものとがあり、名称も商品祭、商工祭、商業祭等と種々に名前が称されている。ただし、「廣告祭とは祭といふ宗教的な型式をとつているが又一方假裝行列といふ點はどこまでも廣告的意識を持つて行はれ、（中略）それは要するに廣告戰術に過ぎない。宗教的意義の發露も廣告祭の一要素には違ひないが、その重要性たるや假裝行列の廣告的意識に比べくもない」（愛知県商品陳列所 1931：18）。との記述もあり、仮装行列が重視されることがよみとれる。

いざれにせよ、これらの記述からも、街頭に進出して大衆にかける作り物、つまり行列をすることが、広告祭において重要視されていたということが伺える。

2-4 行列をする場所

帝都復興祭にて行われた正路喜社主催の広告祭は、芝公園を出発し銀座を練って踊りながら尾張町、尾張町交差点、京橋、須田町交差点、万世橋を通り、松坂屋の前に到着。上野公園にて解散している。帝都復興祭において政府主催の他の行列が宮城前広場（現皇居前広場）に集合したのとは一線を画している。さらに、各種新聞記事では「銀座を目指し」という記述が多數みられる。政府主催の他の行列も銀座を通過はしているが、目指すのはあくまで「宮城前」。つまり、天皇陛下を意識していたことが伺える。では、「銀座」とは何を意味していたのであろうか。

関東大震災により、日本橋、人形町、深川、浅草などのこれまでの盛り場が打撃を受け

た事と、その後のデパートの進出により、銀座が盛り場へと変わっていったことも指摘されている（日本近代史研究所 1980a : 146）。それは、「ジャズ、ダンス、映画、スポーツの流行とあいまって、各地の盛り場にも、大きな影響をおよぼしていった」（日本近代史研究所 1980a : 146）。各種新聞記事での「珍奇」「奇抜」「日本初」という「新しさ」を強調した言葉の頻出も注目すべきであろう。又それは、「廣告祭の作り物の行列はその感謝的意味からしても廣告的價値からしても都會の目抜の場所を通らないと意味をなさない」（愛知県商品陳列所 1931 : 23）という廣告祭の目的にも適った場所であったのだろう。新しい盛り場「銀座」で行列を成すということが、1930 年の廣告祭において意味を成していたのではないだろうか。

盛り上がりを見せた廣告祭は第2次廣告祭として昭和5年4月29日、天長節の佳日を祝い、帝都十七新聞社主催、株式会社中央通信社廣告部・正路喜社後援にて挙行された。ただし、その際「當自者は第一回と同様にメインストリートたる銀座を通ることを主張したが許可されなかつた」（愛知県商品陳列所 1931 : 24）。さらに、大阪や神戸では「廣告の大行進は許されない。大阪では仕方なく河川を利用して水上廣告祭をやるが、その効果は著しく削減される」（愛知県商品陳列所 1931 : 24）という事情があったようである。尚、『どきゅめんと正路社』によれば、翌1931年に挙行予定であった第3次廣告祭は、時局がら準備なかばで自主的に中止した。

2-5 広告祭における音楽

帝都復興祭における廣告祭では、祭の神事とその後で使用する曲を使い分けていた。前述の通り、笙、簞篥の奏楽、最後に一同起立し、《君が代》を二唱して式典の神事を終了する。その後、正路喜社専属ジャズバンドによる《廣告祭行進曲》合唱の後に式典と祝賀会の幕を閉じた。尚、『廣告祭グラフ』掲載の「廣告祭プログラム」では、最後に万歳三唱との記述も見られる。式典の後に行われた廣告行列では、正路喜社のジャズバンドを先頭に《廣告祭行進曲》を歌いながら行列していた。その歌詞は以下の通りである。

堀内敬三作詞作曲、版権所有正路喜社

- 一、産業興り国力振ふ 新らし世を導きて 商工業は躍進やまず 見よ廣告はその先駆
仰げ廣告、是ありてこそ 良き商品は普及せん 喜べ 踊れ、廣告祭 我等が感謝廣告祭
 - 二、栄ゆる市場伸びゆく販路 繁栄の道窮みなく 合理化し行く商工時代 見よ廣告は其の基礎ぞ
仰げ廣告、是ありてこそ 良き生活は築かれん 迎えよ 歌へ 广告祭 我等が感謝廣告祭
- (黒崎 1930 : 13)

では、他の廣告祭での状況はどうだったのでしょうか。日本では最初とされる昭和3年静岡の廣告祭においても、同様の事がなされていた。神前には大黒様を祭り、神社樂人に

よる奏楽。提灯行列においては、《広告祭行進曲》を合唱隊が歌いながら行進の合間に入っていた。その歌詞は以下の通りである。

- 一、みんなひき出せ、コリヤサ 広告祭サ、ソリヤサ
けふの祭を、小判祭を、ナア 賑やかに賑やかに、ヨイヤサヨイヤサ
二、サアサ行こ行こ、コリヤサ 広告祭サ、ソリヤサ
行けば小判の、駿河小判のナア 音がする音がする、ヨイヤサヨイヤサ
三、広告祭で、コリヤサ 黄金の花がさ、ソリヤサ
えらく咲いたよ、うんと咲いたよナア 町ちゆうに町ちう（ママ）に、ヨイヤサヨイヤサ

（愛知県商品陳列所 1931：29）

歌詞に出てくる小判というのは、神前に供えられた駿河小判を形どった金色の御守り札のことであり、この御札は行列においても恵比寿大黒に扮した2名の福男が沿道の見物人に振りまいていた。つまり、この行進曲もこの広告祭専用に作られていたことが想像できる。

又、昭和6年4月11日に京都において行われた第9回日本染織物祭では、行列において、祇園囃子、ジャズバンド、楽隊、三味線等で音頭をとっていたようだ。同年6月2日に行われた横浜貿易新報社主催の商工祭は、横浜公園音楽堂にて開式。祭神大黒天大国主の命を祭り、女子商業生徒の市歌合唱、式典最後には《商工祭行進曲》の合唱及び万歳三唱し、仮装行列に出ている。

上記からも、広告祭の為の独自の曲を作るというのは、帝都復興祭における広告祭に限ったことではなかったことが読み取れるであろう。ただし、この広告祭では正路喜社専属ジャズバンドを用意し、行列においては「ジャズ」ということを盛んに主張していた。各種新聞記事の見出しにも、「珍奇」「奇抜」「日本初」という用語と並び「ジャズ」という言葉も頻出していた。「日本橋方面からやつて来チンドン屋の行列を摺れ違つた。一方は初期の広告媒体として郊外あたりに漸く其名残りを留めて居る旧式の広告行列であり、一方は最新最鋭の広告の粋を集めた行列で、誠に珍妙な対象を為した」（高森 1972：86）という記述もあるが、旧来のものとは違う新しいものを見せる目的は明確にあったようである。その先頭に「ジャズバンド」があったことは興味深い。

2-6 広告劇について

広告祭において、もう一つ注目すべき要素は、広告劇の上演であろう。これは、前述の通り、3月27日に誠文堂主催で朝日講堂にて行われた広告祭感謝の夕にて上演されたのであるが、具体的にはどのようなものであったのか。『広告祭グラフ』によれば、「新東京六景」と題して、西川商店、銀座松屋、美顔化粧品、カルピス、森永チョコレートの各社

による広告を寸劇にて披露するものであった。それぞれには「江戸回憶」、「銀座トピック」、「科学の尖端」、「地下鉄情景此處」、「スポーツ時代」、「広告祭エピローグ」という題目が付けられた（【表2】参照）。観客は「一般人がどういふ風に感興を起すかを見やうと思って會社員、商事會社の重役、大學生、女學生、婦人等に是非見に來てくれるやうにと云つて案内して置いた。」（黒崎 1930:86）と日本毛織廣告部長水田利夫による記述があるよう、広告関係者以外の人々も観覧することが出来たようである。東京マネキンクラブ所属のマネキンガールが出演していたことは確かであるが、その他の出演者の有無については不明である。脚本は誠文堂が刊行していた雑誌『広告界』編集長の室田久良三等の手で書かれ、演出は長岡逸郎によってなされたようである。では、室田はどのような意識のもと、広告劇をつくりあげたのであろうか。以下、『広告祭グラフ』掲載の彼による記述を引用する（下線は筆者による）。

「今迄、廣告劇に似たものは芝居の幕間や、芝居の一部にも似かけたものであるが、これは芝居の片手間に商品の宣傳をして小遣錢儲けにやられたもので、眞の廣告劇の上演を見たのは、確かに日本で最初であると云つても決して過言ではあるまい、劇も次から次へと新興的な氣分が漲つて來た、而して左翼劇が壓倒的感激を與へてゐる日本の劇壇に、次に興つものは正しく、廣告劇であらねばならぬと觀測してゐるのである。廣告劇と云へば、幕が開いて閉ぢるまで廣告で鼻持もりならぬものだと云ふ感念を、想像を觀客が持つものであるが、それを立派に消化して新興の劇、廣告劇として發表し得たことと、觀客に新たなる興味を植えつけられたことは、ともかく嬉かつた。」（黒崎 1930:87）

上記より、単なる宣伝にとどまらず、新興の劇として打ち出したいという意識があったことが読み取れる。これは廣告界のみならず日本の劇壇をも念頭に入れてのことであった。

「要約された脚本の確さ、照明と背景とに尖鋭な藝術効果を示した舞臺装置、日本最初の試みと申し分ありませんでした」（黒崎 1930:86）という感想が資生堂廣告部長高木長葉により書かれているが、藝術性というものも觀客側から感じられるものであったようだ。ただし、この廣告劇も日本オリジナルのものではなく、廣告祭同様、ドイツに元があるようだ。室田の記述には「廣告劇を立派な劇として民衆へ與へてゐるのはドイツである。この國には廣告劇専門の俳優まで揃つてゐる。だから、その劇も素日青らしいものを上演して有名である」（黒崎 1930:87）とあり、ドイツでの廣告劇も劇としての完成度に重きを置いていると、彼は認識していた事が分かる。「劇の脚本は僕等の手で書かれ早速正路喜の三階を借り受けて、鈴(ママ)傳明、吉田謙吉の両君の指導を受けて上演當日まで約十日間の稽古で恥しい乍ら幕を開いたのである。」（黒崎 1930:87）との彼による記述もみられたが、俳優の鈴木傳明や舞台裝置家で美術監督も行う吉田謙吉という、演劇に専門性を持つ人物からのサポートも得て、廣告劇の舞台を創っていたようである。

又、『広告祭グラフ』によると、彼等が広告劇の上演を計画したのは昭和4年9月であった。その経緯は、今回出演のマネキンガールの採用にも関わることでもあった。彼女達が日本マネキンを脱退して新団体の旗上げをした際、室井が何等かの援助をしたいと思ってマネキン座談会を一夕開いたが、その席で彼は「日本のマネキンガールの今後の進出について種々と感じたことを述べ、最後にマネキンは廣告劇にまで進まねば駄目だ、いづれ機會を見て、君達を使って上演しよう」（黒崎 1930：87）と約束したのである。その後この上演を計画したが資力の関係でそのままとなってしまったのが、正路喜社主催の廣告祭に賛同して、この計画がやっと実現し得られたという。正路喜社の力によることが多かったと彼は述べている。演出の長岡はマネキンガールについて「練習を始めて一日二日と猛烈に稽古をはじめたが、何しろ今までにそんなことはしたことがないと云ふので唄もむづかしい。せりふもむづかしい」（黒崎 1930：87）と述べているが、彼女達は演劇に関しては初めて経験することのようであった。しかし、前述の通り、室井には従来のものではない新しいものをという考えがあったようであるが、マネキンガール側もそうした意識のある団体が出演していたのだ。そして、従来の祭あるいは廣告とは違うものを打ち立てようとしていた廣告祭が、この受け皿となっていたのである。

廣告劇での音楽に関することとしては、「ジャズ」という記述が見られる。長岡が種々生じた問題の一つに「ジャズとの交渉」を挙げ、森永製菓廣告部長の小山政也も第5景「スポーツ時代」に関して「ジャズを奏する早慶の應援歌」が印象に残ったと記述している（黒崎 1930：86）。『廣告祭グラフ』における関係者の感想雑記では、その他音楽に関することは述べられておらず、他にどの様な音楽が使用されていたのかは不明であるが、「ジャズ」が生演奏され、一般的概念として成り立っており、演出側からも観客側からも、廣告劇を語るに際の一トピックスとして挙げられていることは興味深い。

以上より、従来のあり方に疑問を持ち、何か先進的なことをしていきたいという試みの一つとして廣告劇を捉えることが出来るであろうが、それをとりまく人々や音楽についても、今後詳しく見ていく必要があるだろう。

3まとめ

本稿では、昭和5年に挙行された帝都復興祭において開催された廣告祭に焦点を当て、その概要を明らかにするとともに、それが行列に重きを置いた祭であり、独自の音楽が使用されていたことを明らかにした。そこには、廣告祭という都市における新興の祭が、従来の祭の形式に則ろうとする部分と、いかに奇抜さ、目新しさを表現していくのか、と試行錯誤する姿が伺える。音楽はその両方を表象する要素の一つとしてその役割を担っていたのであろう。そこに当時の都市文化が生成されていく一端を読み取ることができるのではないだろうか。又、その目的からも読み取れるように、帝都復興祭自体が「帝都」の一

種のプロパガンダであったが、当時の最先端を目指す広告祭がその目的に適っていたことも、この祭が存在し得た大きな要因の一つなのではないか。

末筆になるが、東京以外で行われた他の広告祭との比較を詳しく見ていくとともに、当時のジャズの使用され方についても考察していきたい。又、広告祭を受け皿として派生していった広告劇を追う事で、当時の広告界及び演劇界をも巻き込んだ「新興」という考えの在り方や、それを実際に創り上げる過程を検討していくことが出来るのではないだろうか。

注

注1. 本研究に関連するものとして、花電車について扱った橋爪紳也（1998）や、歓迎のディスプレイという視点からの吉見俊哉（1999）、盛り場という視点からの吉見俊哉（1987）等がある。

主要参考文献・参考資料

愛知県商品陳列所（編）

1931 『愛知商工176号』 名古屋：愛知県商品陳列所：18-34.

青木 保、川本 三郎、筒井 清忠、御厨 貴、山折 哲雄（編）

1999a 『近代日本文化論5 都市文化』 東京：岩波書店.

1999b 『近代日本文化論7 大衆とマスメディア』 東京：岩波書店.

安良城 盛雄

1931 「広告祭に就て」 in 愛知県商品陳列所（編） 1931：18-34.

黒崎 雅雄（編）

1930 『廣告祭グラフ』 東京：正路喜社.

高森 有吉

1972 『どきゅめんと正路喜社』 札幌：北海道正路喜社.

東京市役所（編）

1932 『帝都復興祭志』 東京：東京市役所.

内務省社会局（編）

1926 『大正震災志 内編』 東京：岩波書店.

日本近代史研究所

1980a 『画報 日本近代の歴史 9 岐路に立つ昭和日本』 東京：三省堂.

1980b 『画報 日本近代の歴史 10 非常時への傾斜』 東京：三省堂.

橋爪 伸也

1998 『祝祭の〈帝国〉』 東京：講談社：92-139.

1999 「都市の装飾 歓迎のディスプレイをめぐって」 in 青木（編） 1999a : 157-172.

吉見 俊哉

1987 『都市のドラマトゥルギー』 東京：弘文堂.

1999 「都市の装飾」 in 青木（編） 1999a.

2002 『拡大するモダニティ』 東京：岩波書店.

八巻 俊雄

1992 『日本廣告史』 東京：日本經濟新聞社.

よしおか みき

お茶の水女子大学大学院博士前期課程修了。現在、博士後期課程在学中（比較社会文化学専攻）。

【表1】帝都復興祭における行列（作成：吉岡）

行列名	主催等	行列の構成	音、演奏曲目
天皇陛下御巡幸	内務省、東京府、東京市担当	計7台の自動車（警察官自動車、天皇の自動車、その後5台の自動車が続く）。	サイレンや花火で御巡幸を知らせる。《君が代》
祝賀行列	小学校児童旗行列 東京市	東京市内 230 校の4年生以上約 10 万人	終了時に万歳三唱。演奏の有無不明。
	提灯行列 東京市教育指導	東京市連合青年団、市立中学校、青年訓練所、市区補習学校各生徒約2万人。いずれも東京市所属団体	行列の先導に各音楽隊、ラッパ隊あり。行列と同時に花火が上がる。演奏曲目不明。
	音楽行進 東京市教育指導	陸海軍軍楽隊、府立の学校等、所属は東京市内に止まらない。約 500 人	《君が代マーチ》《帝都復興祝歌》、各部隊の得意とするものを演奏。行進の目的地では合同で《君が代》を吹奏。
	音楽自動車 東京市考案	東京市公園課担当自動車	電気蓄音機を乗せ和洋数種の演奏を行う。電気蓄音機はヴィクターの大蓄音機。
花電車	東京市	東京市電気局の車両7台（「音楽車」「聖壽萬歳」「天の岩戸」「光輝」「花咲く春」「復活」「復興踊」）	先頭の「音楽車」には音楽隊を、最後尾の「復興踊」には蓄音機を搭載。《君が代》《東京交通行進曲》《復興行進曲》《帝都復興祝歌》
広告行列	株式会社正路喜社	東京をはじめ全国各地の会社、商店 163 団体。	行列開始の合図には花火使用。行列時はジャズバンドを先頭に《廣告祭行進曲》を歌う。終了時には一同で《廣告祭歌》を歌い、万歳三唱。

【表2】広告祭タイムスケジュール（『広告祭グラフ』をもとに吉岡作成）

日	催し物	場所	時	イベント名	誰が	その他
3月26日	広告祭	艺公園	12:30	廣告祭開始		
	行列	上野美術館前	14:00	行列開始		
		朝日講堂	20:30	行列終了	一同は《廣告祭歌》と万歳を三唱して解会（予定では16:30までであった）。	
3月27日	広告祭	感謝の辞	18:00	開会の辞	正路喜社重役 黒崎雅雄	
		感謝の挨拶			正路喜社 布屋社長代 理 梶田源一郎	
		〔10分間〕		「広告と社会」	正路喜社 鈴山幸男 広告界編集長 室田久良三	
		〔10分間〕		「広告劇上映に就いて」	国民新聞整理部 長 長田原茂作 朝日新聞社撮影	
		新報記者の見た広告祭について			西川商店マッチペーパーそのままの情景。	
		映画『復興祭ニュース』上映			山商のモボ紳士ステッキガールを物色すべく、舞台上にズラリと並んだ奇麗なのがしぐさ面白衣の色、これが即ち本年銀座松屋が満足した流行色彼女等には大きな字大書書きしてある全部を詠むと銀座松屋銀座店、オット大事なバックは松屋全景、その上にはネオン電気で出来た松屋の商標がさん然と睡いでいる。	
	広告劇	新東京六景の序『江戸回憶』			テーマは流行色。山商のモボ紳士ステッキガールを物色すべく、舞台上にズラリと並んだ奇麗なのがしぐさ面白衣の色、これが即ち本年銀座松屋が満足した流行色彼女等には大きな字大書書きしてある全部を詠むと銀座松屋銀座店、オット大事なバックは松屋全景、その上にはネオン電気で出来た松屋の商標がさん然と睡いでいる。	
		第二：銀座トビック			ハンドハシク以外の品は同伴の男性に持たず手にあるのは手紙の文恋句は「腰下は初恋でしょう。そうしたらこの相手は一番だね」恋愛男、カルビスを得意としている。話はいつの間にか化粧の事にうつる。折から科学の尖端テレビジョンが放送されて来る。暗黙舞台映画団には美顔化粧品の宣伝映画が現われて来る。	
		銀座松屋			此所は上野地下鉄駅、カルビスの広告掲示板の前のベンチに一人の洋装ガールが約束時間過ぎても未だ来ぬ男を待っている。そこに現われた不良モボが彼女を誘わしくして幾度へへ、連れはせの色男、悲願して腰下を下ろしたベンチには手紙が添えてあらはれててなど開いた手紙の文恋句は「腰下は初恋でしょう。そうしたらこの相手は一番だね」恋愛男、カルビスを得意としている。話はいつの間にか化粧の事にうつる。折から科学の尖端テレビジョンが放送されて来る。	
		第三：科学の尖端			ミルクキャラメル、チョコレートの宣伝。ラグビーの選手ユニホーム姿のマネキンが舞台上一杯にはしゃいでいる。観衆も拍手してよろこんでいる。ラグビー隊は決して、「森永ナショコレート」を読まねばなるまい。選手も声高々に森永のミルクキャラメル、チョコレートを和ししている。	
		カルビス				
	第四：地下鉄情景出處					
		第五：スポーツ時代				
		第六：広告祭エピローグ				
		花輪贈呈 正路喜社より出演者へ				
		広告祭行進曲独唱				
		『広告祭ニュース』上映				
		22:00 解散				
		正路喜社写真班				
		撮影				

【表3】日本における広告祭（昭和6年7月迄）（『愛知商工176号』及び新聞記事をもとに吉岡作成）

開催年月日	主催	開催場所	名称	備考
大正15年 4月	名古屋広告協会	名古屋市	名古屋廣告協会創立3周年記念、商品祭	
昭和3年 4月	名古屋広告協会	商工会議所	名古屋廣告協会創立5周年記念、商品祭	
12月 15日	名古屋連合発展会	公園奏楽堂	商品祭	
8月 5, 6, 7日	静岡商業協会	広告祭		以後毎年同期開催（本文p.100参照）。
昭和4年 5月 8日	鹿島商工会議書	広告祭		
1日	全国音響器商組合	音響器祭		作り物は象等の如きものを徒步で相いだ。 音響器の発明社エジソン誕生記念商品巡回祭の 始め。
7月 7日	仙台商工会議所	七夕祭		仙台の七夕祭は少年少女の立夏來達を祈る謂れ に由たるもので最近各商店街が誇客の目的で美観 を競つたものを昭和3年以来商工會議と仙台協賛 会とが主催で年中行事を行つたものである。
8月 16, 17, 18日	静岡美術協会	第2回広告祭		
昭和5年 3月 26日	正路喜仕	東京復興記念広告祭		
6日	岡山市中國民報社	商業祭		参加広告主139名
中旬（第2回）	中国商業新報	東京		
（期日不詳）		商業祭		
4月 19日	浜松市	浜松市		
21日	金澤廣告協会	近江八幡		
10日	大連市大連新聞社	商業祭		
5月	大阪（広告協会主催、川の広告祭）	西大寺等		それぞれ広告祭の催があつた。
6月 2日	横濱貿易新報社	開港記念商工祭		
1日	全国音響器商組合	第2回音響器祭		
7月 15日	名古屋毎日新聞社	広小路祭		
8月 16, 17, 18日	静岡	第3回広告祭		
12月 未	名古屋市新愛知新聞社	市内各商店参加「赤大黒天ニコリ大賣出しき」大黒焼 尺八寸赤大黒天を店頭に飾り大賣出しきした。		
昭和6年 12, 13, 14日	京都染織関係団体	染織祭		
15日	正路喜仕（帝都17新聞社主催、株式会社中央 通信社広告部・正路社後援、とも）	仙台商工記念祭		
4月 29日	通信社（正路喜仕一步、大日本農業會共催 ）	東京日々谷公園	第2回広告祭	
5月 10日	静岡貿易新報社	米の祭	開港記念第2回商工祭	
2日	名古屋新聞社	広告祭		
6月 1日	名古屋中央通信社	第3回音響器祭		
7月 1日	名古屋中央通信社	カフェ祭		